

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

フォークナーとソローに関する研究

彼らの人間と自然に対する考え方について

A Study of Faulkner and Thoreau Their Views on Man and Nature

依 藤 道 夫

YORIFUJI Michio

Summary

William Faulkner, a Deep Southerner, wrote woods and hunting stories including "The Bear". They are stories of the Mississippi Delta. Faulkner also wished to be called "a farmer."

Henry David Thoreau, a New Englander, is often regarded as "a naturalist poet."

Both of them two loved nature a great deal and thought of the relation between man and nature very deeply. They contributed much to the world of American nature writing.

In this paper the author discusses how they had their own close relation with wilderness and how they wrote on what they had thought on nature each in their own way. Faulkner's stories of wilderness cannot be discussed without mentions to the history of planters of the old South and racial problem. Whereas, Thoreau's writing, especially *Walden*, is the very philosophical and scientific study of nature in which he thought not only on nature itself but also on what man should learn from it and how they should live in their daily life.

Though Faulkner and Thoreau lived in quite a different time and place, both of them seem to have pursued in wilderness what was very essential and valuable to man and his life.

1 .

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897 - 1962) は、ミシシッピ州の作家、いわゆる南部作家であり、アメリカ南部貴族の没落を扱った作家、ノーベル文学賞受賞作家として広く知られている。『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) や『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!* 1936) などがそうしたテーマを扱った代表的作品である。が、同時に、フォークナーは、自然や森、狩猟などにも深い関心を寄せ、自らも“フォークナー農場”を持ち、故郷オックスフォード (Oxford) 郊外のテイラー (Taylor) 街道などで乗馬を楽しみ、また、デルタ地域の狩りの一行に加わったりもした。そういうわけで、フォークナーにおける「自然」というテーマ、「自然と人間」というテーマは、相当に重い意味を持っていると考えてよい。

ヘンリー・ソロー (Henry David Thoreau, 1817 - 62) がアメリカのネイチャー・ライティング (nature writing) の歴史における元祖的な存在、大御所的な存在であることはむ

ろんのことである。

フォークナーとソローの二人は、それぞれが生きて活動した時代は100年近くも隔たっているが、ともに、自然や自然と人間というテーマを中心に、森や狩猟、動植物のこと、川や洪水のこと、インディアンや黒人のこと、鉄道のこと・・・等々といった共通の諸テーマをいろいろ持っているのである。

本論では、フォークナーにおいては、中篇小説「熊」(“The Bear”, 1942年5月9日刊の『サタデー・イヴニング・ポスト』(The Saturday Evening Post)に発表)を中心に、短篇「昔の人々」(“The Old People”, 1940)、「デルタの秋」(“Delta Autumn”, 1942)などを扱う。これら3作品はいずれも、『モーゼよ、行け』(Go Down, Moses, 1942)という全体として一つの長篇小説ともみなせる作品に収録されている。また、エッセイ「ミシシッピー」(“The Mississippi”)も用いる。これは雑誌『ホリデー』(Holiday)4月号(1954年)に発表されたものである。

フォークナーには、他にも『大森林』(Big Woods:the Hunting Stories, 1955)という後に編纂された作品もある。それは「熊」,「昔の人々」,「熊狩り」(“A Bear Hunt”),「夜明けのレース」(“Race at Morning”)といった作品を収めている。

また、ソローにおいては、代表作の『ウォールデン』(『森の生活』, Walden, or Life in the Woods, 1854)を中心的に用いる。更に、『コンコード川とメリマック川の一週間』(A Week on the Concord and Merrimack Rivers, 1849)と『メインの森』(The Maine Woods, 1864)も参考にしている。

大まかに言えば、自然や自然と人間というテーマに基づいて、まずフォークナーの場合について述べ、次いでソローの場合を論じ、そのあと両者の対比をしながら考察してゆく。

アメリカ合衆国の文化、文明においては、特に「荒野(自然)」(wilderness (nature))と「文明」(civilization)の対立や融合という二元性の問題がしばしば取り上げられ、論じられている。文学面においても、リチャード・チェース(Richard Chase)などがそうした二重性の観点からアメリカ小説に論考を加えてもいる。アメリカ人にとり、「自然」や「荒野」という要素は重要なものなのである。

2 .

ウィリアム・フォークナーとヘンリー・ソローは、ともに自然に強い愛着をもっていた。二人はともに、純粹で正直な心をもって自然と相対した。両者はともに、自然に付いて深く考察しながら、各自なりに作品を書いていった。彼らは自然と人間についても深く考えた。結局、自然を通して人間を考えたわけである。

フォークナーとヘンリー・ソローは、くしくも、アパラチア山脈(the Appalachian Mountains)の南端と北端^{ふるさと}にあつて、時代こそ違え、各々の故郷の土地、風土を熱烈に愛し、それに強く執着し続けたと言える。そして、フォークナーとヘンリー・ソロー両者の間に直接的つながりはないにしても、フォークナーの自然についての関心や認識には、一世期前のヘンリー・ソローのエコー(echo, “こだま”)が響いていたのではなからうかと思える。

因みに、フォークナーのフィクション的なエッセイ「ミシシッピー」(“The Mississippi”)の中に、次のような一文がある。

彼らは州境を越えてアラバマ州の丘の中に入った。だが、めざす密造所があるのは丘の中ではなかった。そこは丘ではなく、アパラチア山脈がまさに消えようとするその裾だった。・・・

「ミシシッピー」(『フォークナー集』西川正身 他訳。筑摩書房。下線は筆者記す)

比較的短か目のこのエッセイの存在もまた、フォークナーがいかに故郷のミシシッピーを、とりわけ同州の北部丘陵地帯なのであるが、いかに故郷を愛していたか、要するにいかに自身の故郷に深い愛着を持っていたかということをよく示しているのである。このエッセイは、フォークナーが自身の故郷ミシシッピーについて、その熱い思いのたけを述べたものであり、そこには南部人、ミシシッピー人としてのフォークナーの深い郷土愛が感じられるのである。ミシシッピーの地理、風土、歴史、南北戦争、南部の女たち、作者を反映する主人公とおぼしき人物の少年時代から壮年期にかけてのことなどを、郷愁を込めつつ語っている。作者の家族や先祖のこと、実利主義的な新興成金のスノープス(Snopes)一族のこと、更にはミシシッピーの原野や「おやじ」(“Old Man”)と呼ばれる大河ミシシッピー川とその洪水の有様、船のこと、それに北部資本主義の流入や南部世界の変貌(移り変り)などを語り、人工湖、汽車、大森林の巨大な熊“オールド・ベン”(Old Ben)のこと、黒人差別、また主人公の家にいた黒人召使いたちのことなど、現実と彼の作品内容とを取りまぜて、懐かし気につづっている。この作品の中で、フォークナーは「この土地を憎みながらも同時に愛さざるを得ない」と主人公を通して故郷に対する自分の愛憎の気持ち述べている。彼はまたこのエッセイの中で、次のようにも書いている。

久しぶりに見る生まれ故郷。彼はこの土地に生れ、やがてこの地に彼の遺骸は眠ることだろう。そのある部分を憎みながらも、愛さないではいられないこの土地。・・・

「ミシシッピー」(『フォークナー集』)

こうしたミシシッピー州は、亜熱帯地域に属し、夏場は特に高温多湿で、気候や植物体系は日本の南西部(九州や四国の、とりわけその南西部)にも似通っている。フォークナーは、この州の北部丘陵地帯のラファイエット郡オックスフォード(Oxford, Laffayette County)という町に住み、そこを作品の中心的な舞台としたのである。作品世界の中ではヨクナパトーフア郡ジェファスン(Jefferson, Yoknapatawpha County)となっている。

フォークナーと故郷のミシシッピー州の自然との密な関係については、彼と同郷の出身でイェール大学出の法律家であり、彼の初期の文学上の師匠だったフィル・ストーン(Phil Stone, 1893 - 1967)が、フォークナーの処女作詩集『大理石の牧神』(*The Marble Faun*, 1924)に寄せたストーン自身の「序文」(Preface)の中で、次のように述べている。

それら((フォークナーの)詩)はそこでそれらが書かれた土地、それらの作者に誕生と滋養を与えた土地と同じように、陽光と色彩の中に浸っている。作者は、立木と同じく確実にかつ不可避的に、ここの土壤に根差している。

これらの詩の作者は、その生れ故郷の土壤に浸った人物である。彼は全く本能的に南部人であり、それ以上にミシシッピー人である。ジョージ・ムーアはあらゆる普遍的な芸術はまず地方的であることによって偉大となる、と言った。そして北部ミシシッピーの陽光や物まね鳥、青い丘はこの若者の存在そのものの一部なのである。

『大理石の牧神』序文 (Preface) (筆者訳)

フォークナーは、まさしく彼の愛した彼自身の故郷ミシシッピーの土壤や風土が生み出した人物であり、作家である。そういうわけで、フォークナーのこのような郷土愛、故郷への密着度の人生上においてのみならず精神的な面での深さが、彼のデルタ地方への、大森林への並々ならぬ愛着振りや愛惜の深さにもそのままつながっているのだと言える。この点、ヘンリー・ソローにも同様のことが言えるのではあろうが。

3 .

『熊』(“ The Bear ”) という作品は、南部旧家の一つマッキヤスリン家の直系の跡継ぎたるアイク (アイザック) ・マッキヤスリン (Ike (Isaac) McCaslin) 少年の大森林における狩猟を通じてのイニシエーションの物語である。アイク少年は、10才になって初めて、タラハッチ川沿いの大低地 (Big Bottom) において毎年11月の2週間行われる狩猟の一行に加わることを許される (これは1877年ということになっている)。彼は、サム・ファーズ (Sam Fathers) という狩猟の名人たる老人から森のこと、熊や鹿を狩る狩猟のことを教わることになる。彼のクリスマスの贈り物たる元込め銃は、その後彼が70年間所有するものである。少年はサムに教わった通り、狩猟の一団のために見張り場に立つことから始めて、次第に森や狩猟の奥深さを学んでゆく。そして、フォークナー文学に特有のあの謙譲さと忍耐強さを学び取ってゆくのである。

アイク少年やサムの加わる狩猟の一行は、“ オールド・ベン ” (Old Ben) と呼ばれる大熊との密かな出会い (密会) を果たすために毎年この森に来ている。罠のために片足に傷を負った巨大な2本指の足跡を持つ老いた大熊である。この大熊は、とうもろこしの納屋を壊したり、豚や仔牛を丸ごと食ったり、罠や落とし穴を破壊したり、犬を引き裂いたり、また、受けた銃弾も子供の豆鉄砲の豆ほどの効きめもないというような伝説を持っている。大熊は、大森林の神秘的な象徴、荒野 (wilderness) の神聖な象徴と言える存在である。この大熊は、“ 破碎と破壊の回廊 ” (a corridor of wreckage and destruction) を “ 機関車 ” (a locomotive) のように、“ 毛むくじらの巨大な姿 ” (the shaggy tremendous shape) で駆け抜け、「熊」第1章)る、「不屈不撓の時代錯誤」(an anachronism indomitable and invincible) であり、「人間が象に群がる小人のように、“ 嫌悪と恐怖 ” から切りつけた、古の野性の生活の一つの幻、縮図、一つの神格」なのであり、「孤独、不屈でおのれ一人っ切りで、“ 老妻を奪われ、そのすべての息子たちの死んだあとに生きのびた老プリアム ” (old Priam reft of his old wife and outlived all his sons . トロイの最後の王。トロイ陥落で殺された) (やはりいづれも「熊」第1章から) と描写されている。アイク少年には、子供の頃から、人々が大低地 (Big Bottom) に出かけてゆくのは「殺す気さえないあの熊との毎年の密会」のため (「熊」第1章) と思えた。

アイク少年は、狩に加わった2年目、11才の時初めて大熊を目にする。即ち、少年の純粹無垢な心が彼をして神秘の大熊に出合わせるのである。少年は、サム・ファーザーズの言葉「鉄砲のせいだて」を受け入れて、銃を、更には時計もコンパス(磁石)も、文明の利器をすべてあとに残して森に入る。自らを無にし、自身を放棄し、森と、つまり荒野(自然)と全的に一体化することにより初めて大熊に受け入れられたわけである。こうした達成には、ヘンリー・ソローの行動にも通じるものがある。

更に次の年、12才のアイクは初めて牡鹿を射止めて、70才のサム・ファーザーズが鹿の温かい生血^{なまぢ}でもって少年の額^{ひたい}にしるしをつけてくれる。荒野における元服の儀式なのである。

このあたりのことについては、作品「熊」第2章の冒頭に、「その時彼は13になっていた。すでに自分の牡鹿を殺して、サム・ファーザーズがその温かい血で彼の顔に印をつけていたし、次の11月には熊も一頭殺しもした。・・・」とあり、更に短編「昔の人々」にも「かくしてその瞬間がやってきた。彼は引金を引き、サム・ファーザーズが、彼が流させた熱い血で彼の顔に印をつけ、彼は子供であることをやめて獵師になり、大人になったのである」とある。

この「元服の儀式」の折、アイク少年は、彼を受け入れてくれた荒野と永遠に一つにまじり合ってしまったのである。作品「デルタの秋」(“Delta Autumn”)には次のように描かれている。

おいらはお前を殺した、おいらはお前の飛び去ってゆく^{いのち}生命を辱めるような振舞をしてはならない。今から永久においらの振舞はお前の死にふさわしいものにならなければならぬ、といった謙讓な、そしてまた誇り高い気持で立っていた、そういうことのために、いや、それ以上のことのために、サムは彼に印をつけてくれたのだった。

「デルタの秋」(『行け、モーセ』大橋健三郎訳。富山房)

... and Sam ... and marked his face forever while he stood ... humbly and with pride too ...
I slew you; my bearing must not shame your quitting life. My conduct forever onward must become your death; marking him for that and for more than that: ...

“Delta Autumn” (Go Down, Moses, Random House)

フォークナーの荒野(自然)に対する考え方がここによく見られる。彼にとり、その牡鹿もまたその一部であるところの荒野(自然)の前では、人間はちっぽけなものであり、人は絶えず荒野(自然)に対して謙虚さを保ち、畏敬の念を持ち続けていなければならない、という考え方なのである。

こうして本格的な人生入門、イニシエーションを果たしたアイク少年は、終に16才の年(1883年)、大熊オールド・ベンの死、そしてサム・ファーザーズの死に立ち合うことになる。

アイクの精神の父親たるサム・ファーザーズは、やはり作品「熊」その他に登場するブーン・ホーガンベック(Boon Hogganbeck)なる人物と同様に、「高貴なる野蛮人(noble savage)の系譜に属する人物でもある。彼サムは、アイク少年に、森について、狩の仕方

について、そして銃を「いつうつべきかいつうってはならぬか、いつ殺すべきかいつ殺してはならぬかについて、……そのあとどうするべきかについて」教えてくれるのである。自然と一体化して、「森の住人」たるサム・ファーザーズは、インディアンのチカソー族の酋長（the Chickasaw chief）と黒人の奴隷女との間に生まれた男である。サムは、子供の頃、母親とともにアイクの祖父キャロザース・マッキヤスリン（Carothers McCaslin）に奴隷として買われた。作品「熊」では、祖父がそのチカソーのイケモテュッベ（Ikemotubbe）酋長から純種でない速歩の種馬との交換でサムと母親を得た、と書かれている。ともかく狩猟の達人サム・ファーザーズは、謙譲と忍耐を身につけ、老いた大熊との孤独な“兄弟愛”の中に存在している。彼は馬のように大きな野性の青犬を森の納屋に閉じ込めて馴らし、ライオン（Lion）と命名する。大熊を倒すための犬であり、この巨犬はやはり野人、自然人のブーン・ホーガンベックの手にゆだねられる。ブーンは、チカソー族の血が1/4まじっており、そのインディアンの血をむしろ誇りに思っている。酒好きな6フィート4インチの大男で、赤らんだしわのある顔で、直情径行型の人間である。「一つの悪徳（＝ウイスキー）」と「一つの美德（＝忠誠心）」を持つこのブーンやサムは、ソローの『ウォールデン』の中のきこりの男などに類するようでもある。終にライオンが追い詰められた大熊と戦い、ブーンがナイフを手に熊に飛びかかってゆく。熊、ライオン、ブーンの三つがどさりと倒れる。小雨の中、人々は、熊の死体と重傷を負ったライオン、そしてなぜかやはり倒れているサムを小舟で森の中の川を渡してゆく。作品「熊」に何度も出る表現「だから彼（アイク）はライオンを憎み、恐れていなければならなかったのだ」（So he (Ike) should have hated and feared Lion.）は、アイクの複雑な気持をそのままに表わしている。つまり熊の頭かしらオールド・ベンは、荒野の象徴で不滅のものである筈であり、殺されるというようなことはあってはならないことなのであり、かつ人々は元来殺すつもりはない意味深い存在なのである。しかしド・スペイン小佐（Major de Spain）の仔馬を襲った大熊は狩り立てられねばならぬ立場にもある。そしてアイクにとり、ライオンを訓練することは、大熊を殺すこと、つまりは荒野の終焉を招くということになり、そこには大いなる自己矛盾がはらまれているわけである。ライオンは手術のかわりに死に、やがてサムも、ブーンに頼んで殺してもらう。結局サム・ファーザーズは、荒野の一部だったオールド・ベンが死に、ライオンも死に、弟子のアイク少年も一人前の獵師に育て上げた、荒野のゆく末も見た思いにかられ、自らも死を選んだと言える。つまり、サムは、荒野と進退をともしたわけである。大熊が銃でなく、ナイフによりとどめを刺されたのは、フォークナーが大熊、荒野の象徴物の終焉を古典的な手法で遂げさせたことを意味しているであろうし、サムの事実上の自決とブーンやアイクの悲痛な叫びは、作中の言葉「何ものかの終りが始まっていた」の結末を悼むものとみることができる。

もともと少年にとり、大森林の感覚は、

危険な、或はとくに敵対的な特質ではなく、深々として、鋭敏で、巨大で、瞑想するような特質であり

「昔の人々」（『行け、モーセ』 富山房）

not a quality dangerous or particularly inimical, but profound, sentient, gigantic and

brooding, ...

“ The Old People ” (*Co Down, Moses*)

したのである。アイクにとり、サムは彼の教師であった。兎やリスは彼の幼稚園であり、荒野は彼の大学であり、老熊は彼の母校でもあったのである。

18才の時（1885年）アイクは森林（荒野）を再訪するが、この年ド・スペイン少佐は、森林の所有地の材木伐採の権利をメンフィス（Memphis）のある会社に売り渡していたのである。再訪したアイクの見たものは、既に半分は完成している新しいかんかけ工場や鉄のレールの山、クレオソートのにおう線路用枕木の山、労働者用テントなどである。

アイクが森林に乗って入った丸太列車は、その列車が20年前初めて材木伐採場に入った時、一頭の熊がブレーキの音や汽笛に驚いてとねりこの木によじ登り、36時間もの間水も飲まずにその木の上にはいたあと、ブーンやド・スペイン少佐、アッシュラの人々の配慮のもと、森の中に駆け去っていったという話を伝える列車である（「熊」第5章）。フォークナーはその頃は害がなかった、とつけ加えているが、そしてこの話は、アイク少年にとり過去の話なのであるが、やがて森が開発されていって大きな工場が出来上がり、動物たちが追い立てられてゆくことに、つまり荒野が後退してゆくことになる、その予兆もまた感じさせるエピソードなのである。森を再訪したアイクには、今やド・スペイン少佐が森へ戻らなかった理由が分かり、自分ももう2度と戻ってこないだろう、ということがわかるのである。

ライオンとサム・ファーザーズの二つの墓のところに来たアイクは想う。

（アイクは）その塚を離れた、その塚 それは、死というものが存在しないが故に決して死者の住居などではないもの サムもライオンも、大地にしっかりと縛りつけられているのではなくて大地のなかで自由であり、大地のなかにあるのではなくて大地のものであり、数知れぬものでありながら、しかも一つ一つの無数の部分が散らばってはいないもの ...

「熊」第5章（『行け、モーセ』 富山房）

... because there was no death, not Lion and not Sam : not held fast in earth but free in earth and not in earth but of death, ...

“ The Bear ”, Chapter 5 (*Co Down, Moses*)

アイクは、荒野（自然）の化身のような存在だったライオンやサム・ファーザーズ、オールド・ベンが再び荒野に甦り、その一部に普遍のものとなって戻っていったと考えているのである。

アイクにとり、「この森林こそが彼の恋人であり、彼の妻であるにほかならない」のである（「熊」第5章）。作品「熊」の最後のところで、アイクが林間地の沢山のリスのいるゴムの木のところで見たものは、ブーンが喚きながらばらした銃をめったやたらに銃尾めがけて打ちつけている姿であった。

「ここを出ていくがええだ!こいつらに手を触れるんじゃねえだぞ! 一匹だって触れるんじゃねえだぞ! こいつらはおらのもんだでな!」

「熊」第5章(『行け、モーセ』)

“Get out of here! Dont touch them! Dont touch a one of them! They are mine!”

“The Bear”, Chapter 5 (Go Down. Moses)

ブーンのこのヒステリックな行動と悲痛な叫びは、サムやライオンやオールド・ベンともどもに失われてゆく荒野(自然)を惜しみ、悲しみ、かばい、やり場のない怒りを表明しているように思えるのである。

4 .

短編「デルタの秋」(“Delta Autumn”)においては、老人になったアイク・マックスリンが登場している。作中では、アイクおじさん(Uncle Ike)が、60年前に初めて狩猟をやり始めた頃のことを回想したりもする。アイクおじさんが少年の頃、この大低地は、^{ビッグ・ボタム}ジェファスン(Jefferson)の町からたったの30マイルしか離れておらず、馬や荷車で簡単に行くことができた。だが、アイクが老人となった今は、ジェファスンから200マイルも車を走らせてやっと狩猟のできる荒野が見えてくるといった有様である。アイクおじさんは、60年間この土地の変遷を見続けて来ている。

今では、その土地には、アメリカ豹の代りに機関車が走り、インディアンの築いた高みが残るだけなのである。かつては町から30マイルの荒野が今は200マイルも先に離れた。アイク老人は、その荒野が征服され、破壊されるというよりもむしろ、その目的が果たされ、時代遅れになったがゆえに荒野が自ら退いていって、この逆三角形、丘陵とミシシッピ川の間この^{がた}形^{ひょう}の大地の一部(逆三角形の形になったデルタ)を南に向って後退していって、終には、一つの巨大な茂みとなってゆくのを見守って来たのである。

残されたものがこの漏斗型の究極的な突端において集約され、しばし押しとどめられて、瞑想するがごとき、量り知れぬ不可侵入性の一つの巨大な茂みとなってゆくのを

…

「デルタの秋」(『行け、モーセ』)

... until what was left of it seemed now to be gathered and for the time arrested in one tremendous density of brooding and inscrutable impenetrability at the ultimate funnelling tip.

“Delta Autumn”, (Go Down. Moses)

「デルタの秋」という作品においては、アイクおじさんが若い世代の者たちと森へ狩猟にゆくのであるが、車を走らせて、コンクリート道から砂利道へ、そして泥道へと進むにつれて、彼には、昔の土地へと戻ってゆく記憶の逆行が速度を増して起っているように思われるのである。昔の大森林の面影を追う老人は、「人間が荒しまわる森や畑と人間が殺

しまわる獲物は、人間の犯罪と罪の結果にして印となるじゃろう、人間の罰となるじゃろう」と考えている（「デルタの秋」）。

ともかく、フォークナーには、このように、「熊」や「デルタの秋」を通じて森林破壊や今日で言うエコロジ的な問題にまで想いを馳せている面があるわけである。このあたりには、ソローにも通じる面が十分に指摘できるように思える。

5 .

しかしながら、作品「熊」にも、またこの「デルタの秋」においても、狩猟の物語、森林の物語という「メイン・テーマ」に絡みながら、と言うか、むしろそれに融合する形で、と言うべきであろうが、南部的な「土地論」とか「人種問題」などが取り上げられている。ここが誠にフォークナーらしいところであり、ヘンリー・ソローの世界と最も異なる面と言うことができる。フォークナーの狩猟や森林の物語にあっては、森における狩猟や人間、文明の手による森林の破壊と後退というテーマと南部的、歴史的農園体制的な「土地」とか「土地所有」といったテーマや人種問題が絡む呪われた「土地問題」のテーマとが、ともに重要な要素となっているわけである。

作品「熊」の中の第4章だけは、他の章とは内容が非常に異なっている。「熊」は全体として、アイク・マッキャスリン少年を中心としたデルタ地域大森林の狩猟と大森林が次第に失われてゆく有様を描いた物語なのであるが、第4章だけはそうした流れから孤立している。そこでは、アイク少年がオールド・ベンやライオン、サムたちが死んだ年、少年が16才の年に、マッキャスリン農園の古い台帳（年代記）を読んだことをきっかけにして、彼アイクが21才の年（1888年）にこの農園の直系の相続者であるにもかかわらず、その相続権を放棄し、それをいとこのマッキャスリン（キャス）に譲って、自らは大工となってジェファソンの町の下宿屋に移り住んでしまう話が描かれている。この第4章では、マッキャスリン家の先祖のことや、同農園の歴史、黒人奴隷のこと、南北戦争論や南部論などが主として対話の形でつづられているのである。なお、この場合、「土地」というのは、「荒野」ということではなくて、「耕地」という問題になる。

ジェファソンの町の東北方17マイルにあるマッキャスリン農園の創立者でアイクの祖父たるキャロザース・マッキャスリン（Carothers McCaslin）は、かつて自分の所有する奴隷女ユーニス（Eunice）に女子を生まれ、のちにまたその子（女子）トマシナ（トミー、Tomasina（Tom(e)y））にまた子供テレル（トミーのタール、Terrel（Tomy's Turl））を生ませていたのである。母ユーニスは、1832年のクリスマスの日に入水自殺をしてしまう。南部の近親相姦の悲劇である。アイク青年は、土地台帳を読んで、こうした祖父の事蹟を知る。また、祖父の双子の子たち、即ちアイクの父たるアンクル・バック（Uncle Buck）やおじアンクル・バディ（Uncle Buddy）の事蹟も知るのである。只し、アンクル・バックとアンクル・バディは、奴隷たちをなるべく自由にふるまわせようと努めたようである。

アイクは、土地というものは本来人間に属するものではない、それは土地そのものに属するものにすぎない、従ってそれを売買する権利は人間にはない、なぜならその土地はその人間に真に所有されたことなど一度もなかったものなのであるから　と考えている。アイクは「サム・ファーザーズがおいらを自由にしてくれたんだ」と言い、先祖の手で汚

れたこの農園を自分の子孫のために振り捨てることはできると、その悪と恥とを振り捨てることはできると知り、振り捨てたのである、いや、振り捨てたと思ったのである。

ところが、「デルタの秋」において見るように、マッキヤスリン一族のロス・エドモンズ (Roth Edmonds) が、知らなかったこととは言え、テレル (トミーのタール) の子ジェームズ・ビーチャム (テニーのジム、James Beauchamp (Tennie's Jim)) の孫に当たる女性を愛人とし、赤子を生ませてしまうのである。

先祖の犯した罪がまた繰り返されてしまった。アイクの遺産放棄という贖罪の行為は、一体何だったのであろうか。女はアイク老人を、「あんたがあの人のおじいさんにあの土地をあげてしまったから」こうなったのよ、と言ってなじる。アイクにできるのは、コンブソン将軍から受け継いだ角笛を女の抱えた赤ん坊に与えることだけである。そして女に、北部へ帰り、同じ人種たる黒人の男と結婚しなさい、と諭すばかりである。アイクは、雨に打たれるテントの中で、一人孤独に思う。

わしが昔知っておった、今は破壊されてしもうた森が報復を求めて叫びをあげないのも、なんの不思議もない!と彼は思った。それを破壊した人間どもが、自分でその森の報復を仕あげるまでのことじゃ。

「デルタの秋」(『行け、モーセ』)

No wonder the ruined woods I used to know dont cry for retribution ! he thought: The people who have destroyed it will accomplish its revenge.

“ Delta Autumn ” (*Go Down, Moses*)

フォークナーの場合、森 (荒野)、つまりは自然と南部人の歴史的な営みとが絡み合っていると言える。

アイク老人、つまりフォークナーの頭の中では、自然が後退し失われるということは、人間の侵略的行為や罪業深い営みと深く関連していたということなのである。

「熊」の第4章が作品全体の中で持つ意味であるが、フォークナーは森や動物を描写しても、ソローのように科学的、博物学的、また写實的、客観的には描かなかったのである。フォークナーの場合は極めて作家的、文学的、主観的、精神的でさえあり、自らを対象の中へと没入させることさえあるように思える。

そういうわけで、「熊」は浅く受けとめる向きには単なる少年の狩猟入門、イニシエーションの物語、人々の大わらわの熊狩り物語と映りかねないのであるが、実際には、この第4章のおかげで、「熊」という作品全体が重層化し、立体化し、深化して、重みを増していると言える。マルカム・カウリー (Malcolm Cowley, 1898 - 1989) も、フォークナーが『大森林』(*The Big Woods*, 1955) の中に「熊」を再録した時に第4章を省いたことについて、次のように述べている。

結果は、ずっと統一のとれた作品になりはしたが、省かない場合にこの作品が有していた心につきまとうような豊力的なものが失われてしまったのである。

『ポータブル・フォークナー』(Ed. by Malcolm Cowley,

まさにその通りである。フォークナーの世界の場合、やはり、荒野と南部世界的な人間の歴史的営みとは一体でなければならないのである。

6 .

次は、ヘンリー・ソローについて考えてみる。

フォークナー流の表現に従えば、アパラチア山脈の北端に位置するニュー・イングランドがヘンリー・デヴィッド・ソローの故郷であり、彼の活動の舞台である。高温多湿の亜熱帯的なミシシッ피ーに対して、こちらは当然、北方の(寒冷地的な)気候帯に属している。冬場はとりわけ寒く、雪や氷も多いわけである。

「こけももの真の味を知るには自分自身で摘み取る必要がある」(『ウォールデン』“池”)「湖水は大地の眼であり、観る者はそれをのぞきこんで自分自身の心の深さを測る」(『ウォールデン』“池”)、或いは「大地を楽しめ、けれどもも所有するな」(『ウォールデン』“ベーカー農場”)などはいずれも、ソローの考え方をストレートに表わした表現ばかりである。トランセンデンタリストのエマーソン(Ralph Waldo Emerson, 1803 - 82)の弟子だったソローは、師よりもはるかに行動的な実践主義者であり、荒野(自然)の中に人間にとっての真に生きるべき道を、彼の言葉によれば、「人生にとっての本質的(essential)なものを求めて」体ごと分け入っていったのである。

ソローはコンコード(Concord)の郊外のウォールデン池畔(Walden Pond)に独りで住んだわけであるが、その実験生活の結果得られた成果が作品『ウォールデン』であった。ソローは、人々が無駄にあくせくと人生を送っている、彼らの本当にやりたいことをなぜやらないのか、と問いかけ、「本質的(essential)なもの」を見つけようと、人生を真に生きようと欲して、森に赴いたわけである。彼は「(人々が)農場にしばられるのも監獄にしばられるのも同じこと」(It makes but little difference whether you are committed to a farm or the county jail. (『ウォールデン』“住んだ場所と住んだ目的”))だと言い、土の農奴になるのは愚かなことだと言っている。また、住民はハーキュリーズの12の仕事以上の苦行に喘いでいるとも言っている。そういうわけで、ソローは、土地やら家賃やらの鎖につながれて「静かな絶望の生活を送っている」世俗の人々から離れ、一人で荒野、つまり森、自然の中へ心身の、そして人生の「強壮薬」を求めて入っていった。ソローにとり、自然というものは、「いくらあっても十分過ぎることのないもの」であった。あとでまた言及するが、フォークナーにとっても、自然は人の心を癒す力を秘めている(『サートリス』(Sartoris, 1929)など)。

ソローは、ニュー・イングランドの人々に洞察力が欠けていると批判した。だから人々はふがいない生活をしているのだというわけである。

ソローは、人々があるように見えるものがあるものだと思い込んでいる、として、洞察力と思索の大切さを説いた。それらにより真実や崇高、高貴なものを探究しようと努めたわけである。そのようなソローの固い決意は、「私は断固としてわが一日を送る覚悟で云々」とか「私は深く飲みたい。星を真砂とした大空で釣をしたい」(『ウォールデン』“住んだ場所と住んだ目的”))といった言葉に如実に表われている。更に彼は、

偉大で価値あるもののみが恒久的な絶対的な存在を持つことを つまらぬ怖れとつまらぬ楽しみは真実の影にすぎないことをさとする

『ウォールデン』“ 住んだ場所と住んだ目的 ”(『森の生活』神吉三郎訳。岩波書店)

We perceive that only great and worthy things have any permanent and absolute existence, __that petty fears and petty pleasures are but the shadow of the reality.

Walden, “ Where I lived,and What I Lived For ”

とも述べている。

以上のような意図や目的を解明し、達成するには、自然を通して人間を考えるということが最もふさわしい、とソローは考えていた。彼は「自然の中は孤独ではない」と言い切り、他人のする「(森の中に一人で暮らして) 淋しくないか? 」という質問を愚問として反論を加えている。「我々の遊星は銀河の中にあるべきではないか? 」というわけである。

ソローは、「孤独は健全 (I find it wholesome to be alone the greater part of the time.)」、
「社交は安価 (society is commonly too cheap)」(ともに『ウォールデン』“ 孤独 ”) と言い、「私は孤独にあらず、太陽は孤り、神は孤り」とうそぶき、「私は一平方マイルにたった一人の住民」と誇っている。孤独が人をしてその人自身から抜け出させると考えていたのである。

7 .

ソローは観察と思索を続け、自然耕法で豆畑などの農業もした。ソローのウォールデン湖の観察は、鋭く、細やかで、科学的でさえある。「コンコードの宝石」「私の井戸」たるウォールデンの環境や地形、まわりの山、丘、近くの池々、住まいからの景観が詳細に、写實的に生き生きと描かれている。ウォールデンの水は主に青と緑の2色で、他にもいろいろな場合の色合いの変化が見られる様が描写されている。清らかで美しい湖の周辺の動植物の観察も実に精緻、綿密である。そして愛情も込もっている。

パーチやパウトなどコイやウグイなどの魚類について、特にコガマスは随一の自慢と誇っている。蛙や亀、ジャコーネズミなどの小動物、カモやガチョウ、ヤマバト、カイツブリなどの鳥類も言及されている。2 民族の戦争になぞらえた赤蠟軍団と黒蠟軍団の凄まじい戦いも詳細に語られる。更に、鳴きフクロウの暗い「墓場の小歌」やカイツブリとソローの出し抜き合戦はとても興味深い。

ウォールデンは、岸から急に深くなっており、濁っていない。魚類は少な目で、水草類も少なく、植物は清らかである。水中の古い逆さ松の観察も見られる。

森の樹木については、「ベーカー農場」の章などに言及がある。ソローは「学者を訪れる代りに私はよく、どれかの樹を訪問したものだ」と「ベーカー農場」で述べている。ソローは更に、池の岸辺の古道や水位の変化、増水の源泉のことなど、又、岸辺の整然とした石のこと、それにまつわる山が崩れ落ち、沈んでウォールデンが出来たというインディアンの古い伝説などについても書いている。彼は1846年初めに水深を測り、池の地図も作っている。J・ミルトンの『失樂園』(Paradise Lost, 1667) の一部、

高まる丘陵がそびえる高さだけそれだけ低く

くぼんだ底は沈んだ 広く、深くひろびろした水をたたえる床^{とこ}

『ウォールデン』“冬の池”

“ So high as heaved the tumid hills, so low
Down sunk a hollow bottom broad and deep,
Capacious bed of waters. ”

Walden, “ The Pond in Winter ” (*Walden, or, Life in the Woods,*
Rinehart & Company)

まであげて、無限の深さについて論じている。合わせて人間の想像力の深さ高さに言及してもいるわけである。ソローは「池についての観察は、倫理においても真実だ」と言い、池水の測量は人間の心の測量ともなり、人間の心の深浅の測量にも通じるだろうと述べている。

ソローの観察は、単なる表面的なそれではなく、このように常に対象物の向うにあるものへの洞察へと及んでいるのである。

ソローは、「自然は独りで最もよく栄える」と言っている。そして、森林の人間の手による破壊のことに言及している。彼は森の伐採を非難し、自身の詩神が沈黙してしまった、森が切り倒されたのにどうして小鳥の歌を期待できるか、と嘆くのである。かつては高く茂った松やカシの森で囲まれていたウォールデンなのに、その後、そうした茂った森もなくなり、しかも池の水をパイプで村まで引く計画まであり、耳をつんざくいななきが町中に響く鉄道という悪魔的な「鉄の馬」がそのひづめでボイリング・スプリング (Boiling Spring) の水をにごし、ウォールデンの岸辺を食い尽くしたのである。

それでも、ソローは、木こりが木を切り、アイルランド人が豚小屋をたて、鉄道がその境を犯し、そして氷業者がそれを掬い取ったにもかかわらず、純粋なウォールデンはなお変わらず、彼ソローの若い頃見た同じ水をたたえていると言うのである。そしてソローは、すべての変化は自分のほうにあるとしている。「ああ、ここにウォールデンがある」 (Why, here is Walden, the same woodland lake that I discovered so many years ago.) というわけである (『ウォールデン』“池”)。

ソローの聴覚は、そして心は静寂の森の中であって、いろいろな音 (sound) に反応している。

鳥、牛、蛙、鶏の鳴き声、汽車の音、街道の荷車の音、日曜日の鐘の音などである。ソローはそうした音や響きについて感想を述べ、「音」に託して人生哲学を語っている。夜鷹や鳴きフクロウ、ほうほうフクロウなどの声も独特である。「トロイの馬」たる汽車 (iron horse) や日曜の鐘の音は森の声、宇宙の琴の振動である。

汽車は、ウォールデンのそばを内外へ向けて人や物を運んでゆくが、ソローの汽車への反応は、それが新しい時代を告げるものという認識と同時に、森や自然を乱すものという感覚もまた有している。更に、彼は汽車は人々の日常生活に時間の正確さをもたらした、とも考えている。

ソローは、ウォールデンの冬の氷も詳しく観察している。氷の色にも青と緑がある。ある時など、業者が切り出した1万トンもの氷がなぜか氷置場に放置されたままになってしまった。それはソローにとり人々の空しい空騒ぎと見えたと違いない。ソローはバケツの水は腐る、これは愛情である。他方、氷は腐らない、こちらは理性だ、と言っている。

ソローの訪問客も、彼の興味深い観察対象である。彼にとり、好ましい訪問客とそうでないのがあるが、前者は心の通う愉快な輩で、後者は利得を求めてあくせくしている類の「人間荒らし」なのである。ソローは、元来、隠者ではないのである。彼はこう言っている。

私は私の家に三つの椅子を持っていた。その一つは孤独のため、その二は友情のため、その三は社交のためのものである。

『ウォールデン』“訪問者”

I had three chairs in my house; one for solitude, two for friendship, three for society.

Walden, “Visitors”

ソローの訪問者の中には、詩人のエラリー・チャニング (Ellery Channing, 1780 - 1842) や哲学者・教育者のブロンソン・オールcott (Amos Bronson Alcott, 1799 - 1888)、木コリや農夫、貧しい窮民、逃亡奴隷さえいた。

ソローはあるカナダ人の木コリと気が合った。約28才の荒けづりで単純な自然児で、動物的で、子供のようなものである。話し好きなこの男と、ソローは水や金銭、改革などにつき問答を楽しむが、この木コリのカナダ人は、フォークナーの自然児的人物ブーン・ホーガンベックなどを連想させる。

ソローは、アイルランド人ジョン・フィールド一家を描いているが、ジョンは正直者だが、自己流の人生しか押し通せない、うだつのあがらぬ人物である。だが、ソローにとり愛すべきタイプの人物なのである。

雪どけの春が近づいてくると、ソローは流水、流砂を精細に観察し、生き生きと描写している。あふれ出る砂は地球が生きていることを実感させる。解氷期の池は動き、轟き、大地は生きて活動する。

流砂の現象は、独特のもので、ソローは、それを河の源や人体 “人間は溶けつつある粘土の固まり” にたとえ、それを排泄物と見、地球の裏返し、自然の肺腑の暗示などとみなしている。自然は人類の母で、これは地中から霜が這い出たものであり、これが春である。冬の食もたれと悪いガスをそうじするものと見ているのである。結局、ソローにとり、「地球は生きている詩」であり、ソローにおいては一自然現象の観察がかくも生き生きとして壮大な思想に昇華してゆくのである。まことにソローらしいところである。

インディアンについては、ソローは『ウォールデン』や『メインの森』などで言及しているが、彼はたとえばウインスロー (Winslow) がマサソイト (Massasoit) 酋長を訪ねた時に受けたまことに純朴な、質素なもてなしに一つの真実を見出している (一つのベッドと一緒に寝かされ、粗末な魚料理を食べるのである)。(『ウォールデン』“訪問者”)

フォークナーは、短編「紅い葉」(“Red Leaves”)の中で、未開の荒野で生きて来たイ

インディアンが白人の西欧文明や奴隷制度まで受け入れたがゆえに退廢的^{たいはい}に、無気力になり、随落した有様をアイロニーを込めて描いている。

ソローは、人間と人生の探求のため、真理を求めて自然に分け入り、自然に相対していった。ソローも、少年時代の釣りや狩りの体験が彼をして自然に向かわせるきっかけになった。ヘミングウェーが少年時代に父親の影響を受けて自然に親しむようになったことなどを連想させもする。フォークナーもまた、少年時代から町の人々のデルタ地域への狩猟行のことをよく知っていた。

ソローは、フォークナーと違って、背景的というか、環境的には、ずっと自由なところ（自由さ）があったのではないかと思える。即ち、ソローの場合には、北部的、ニュー・イングランド的な自由さ、超絶主義的エマーソンの楽観主義の開放的雰囲気、清教主義社会の理想主義や北部的民主主義（個人主義）や平民主義の気風などがその環境的要素として指摘できるように思える。フォークナーの場合は、南部的、歴史的、伝統的、階級的、家族的、更に慣習的なしぼりが強かったのではないかと、また彼は4人兄弟の長男であったから、旧家を継ぐという立場も彼の精神に対する一種の制約的要素、時として重圧ともなったと思われる。そうした心情は、『サートリス』(Sartoris, 1929)における主人公ベイヤード・サートリス(Bayard Sartoris)や『響きと怒り』(1929)のコンブソン家の跡取り息子クエンティン(Quentin)たちの悲劇的な軌跡を描く行動などに反映されている。これら両作品は、特にフォークナー初期の、彼が若く多感な頃の作品なのである。即ち、若い頃のフォークナーの心情や感覚を如実に反映している作品なのである。もっとも、ソローにも父親の鉛筆製造の家業はあり、また、彼自身も『ウォールデン』の中で、大学までやってもらっていながら...、とも言っているのであるが。

旧家の長男のフォークナーの窮屈さは、階級制度や南部農園体制の名残りの中の旧家同士の込み入った関係や密な連帯意識、南部騎士道精神、古いルールや慣習といったしがらみを抱えていたことにあった。狭い田舎町の世間的な眼やゴシップなども束縛的な要素である。

もっとも、ソローの場合も、村人たちの噂話や陰口などといったわずらわしいものに悩まされてはいたようである。

ともかく、ソローは、ユニバーサルで汎神論的な立場をよしとし、彼にふさわしい舞台背景はおおらかで広大な自然（荒野）であった。彼は森や野山を観察し、探究探訪し、旅行し、一人自然の只中に身を置いて、世俗の人々が^{ちまた}の日常生活で見えないもの、見落としてしまうものを見つけたり、拾い出したりしようと努めたのである。そうしたものに絶対的な真実が存すると考えたからである。

8 .

ソローには楽観的で前向きで威勢のいい、人を鼓舞するところがある。確信や信念をもって信ずる道を邁進出来、ゆるがない。皮肉や逆説的言辞を弄してみせつつも、基本的にはエマーソン同様に人間信頼の立場に立っている。その点、ナサニエル・ホーソンやフォークナーのやや退き^ひ気味の、懐疑的、煩悶的、そしてしばしばペシミスティックな心情とはかけ離れたマインドの持主、価値観の持主だったと言える。ソローは、動植物や自然現

象を眺め、土地や森林の、地形の景観を見渡して、それらから古代ギリシャ人や古代東洋人のように教訓や真理を得ようとつとめた。そのような学びを通して、よりよい心の姿勢、より高尚でより豊かな精神のありようを実現できるのではないかと考え、そのように努めたのであろう。

ソローは、人間や人間生活の悪しき側面や無駄な側面を非難しつつも、人間の根本的な善性を信じている。

ソローは、太陽とともに起きて仕事をすることを推奨^{しょう}し、そこに新しい発見を見ている。観察する対象物から、それが水や岩や道であってさえも、いつもそこから倫理的、精神的な教訓や真理を読み取ろうとした。木コリ仕事や畑仕事もそうした学びの場であった。蟻同士の戦いは“民族戦争”だし、春の流砂も人間界の汚物の噴出と見ていた。世間の人々の無意味な苦役する姿を客観視しつつ、彼らがそうでなければもっと真実の人生を存分に楽しめたかもしれない、もっと充実した人生を過ごせたのではないかと惜しんだわけである。

そこでソローは、目先のものから眼を転じ、自然や荒野の只中に身を置いてみよ、さすれば全く違った世界が価値観が見えてくるぞ、と忠告し、世俗の中にはもっと“余白”が必要だ、その“余白”こそが人々に全く新しい視点を与え、対象物の全く異なった意味を或いは見落としていた真の意味を気づかせてくれるであろうと主張しているのである。

ウォールデン湖上のカイツブリとのやり合い、“知恵くらべ”は、珍妙ながらもなかなか示唆的(suggestive)である。カイツブリを出し抜き、又出し抜かれる行為を演じつつ、ソローが、お金やら地位やら名誉やら世間体やらのため休む間もなくあくせく汗を流し続ける俗塵にまみれた人々の姿、そのありようを、カイツブリの無気味な笑いを借りて、喘^{わら}っているような印象を受ける。自然は、自然を愛し、自然と一体化しようとする者を、自然から教えを得ようとする者を、啓発されたいと願う者を決して裏切らない、逆に迎え入れてくれる、抱きかかえてくれるものだ、とソローは考える。

ソローの自然観はフォークナーの自然観と鋭く対立するようなものではない。両者のそれには、共通する部分とそれぞれにかなり色合いが違う部分との両面がともに混在し、入りまじっていると見るべきである。フォークナーには、ソローのエコー(こだま)の部分があると言える。

9 .

最後に、フォークナーとソローの両者、両世界を直接に対比して考えてみる。

まず、フォークナーは南部人、それも深南部人(Deep Southerner)であるに対し、ソローは北部人、それもニュー・イングランド人(New Englander)である。両者ともに南北それぞれ典型的な地域^{エリア}の人である(アパラチア山脈の両端の人である)。

フォークナーの南部農本主義体制に対して、ソローの頃のニュー・イングランドには、産業革命の波が押し寄せて来ていた。

フォークナー世界にあっては、黒人の問題、奴隷制の、南北戦争の問題が重要な要素であり、フォークナー自身深南部人として必ずしも奴隷制に反対ではなかったが、ソローは、他の多くのニュー・イングランドの知識人たちと同様に奴隷制に反対する立場を貫いたわけである。フォークナーは、衰えつつあるものの南部の大プランターの家の息子で、旧家

の大家族的雰囲気の中にあっただが、ソローは一市民の、コンコードの鉛筆製造職人の息子で、中産階級の市民的家族の一員であった。フォークナーは、歴史や時間に執着し、過去を重んじ、かつそれにとらわれ、過去の栄光や悲劇を懐かしみ、惜しんだが、ソローは、今現在の空間を生きる姿勢を鮮明にしている。フォークナーは大学教育をほとんど受けないうに等しいのに、ソローはハーバード大学を卒業している。フォークナーは師匠としてフィル・ストーンやシャーウッド・アンダーソンを持ち、小説を書くことになったが、ソローはエマーソンの弟子として、「博物学者詩人」(Naturalist poet)として、自然の中に歩み入り、旅行しながら、自然を観察し、思索し、その結果を記録した。

フォークナーは第一次世界大戦に参戦したいと願ったが、ソローはメキシコ戦争に反対し、納税を拒否して一晩入牢さえしている。

フォークナーは、狩猟(hunting)を晩年まで楽しんでいるが、ソローは、狩猟や釣りは少年時代から始めたものの、早くから狩猟そのものを越えた領域に立とうとしていたように思える。

フォークナーは晩年(1955年)に日本を訪れたりもしたが、その精神教養の基盤は、あくまでもシェークスピアやギリシャ・ラテンの古典、聖書などを中心とするヨーロッパ文化、文学にあった。他方、ソローはやはり西洋古典に詳しく、ヨーロッパ的知識や教養を基としたが、孔子や孟子などの中国の古典やインドの聖典などの東洋的知識も有していた。フォークナーは自然の人間に対する呪いや復讐のようなものも感じており、また奴隷制度の歴史も絡んだキリスト教的原罪のテーマをホーソンのように抱えていたのに対して、ソローのほうは、自然信仰的、汎神論的楽観主義や明解さを有していた。ソローは現代文明批判を彼の眼目の一つにしていたと言える。そしてその対極に自然を置いていた。他方、フォークナーのアイクおじさんには諦観(あきらめ)的な色合い、過去への逃避といった色合いが見てとれ、そういう意味ではある種のあいまいさ、限界が感じられる。それに対して、ソローは、あくまで、前進的、積極的で、改革的である。両者の奴隷制についての姿勢などには、まさにそうしたことが言えるわけである。

フォークナーは忍耐とか勇氣といった美德を重んじたものの、しばしば詠嘆的、情緒的、回想的であるに対して、ソローは超絶主義的楽観主義を持ち、好奇心が旺盛で、科学的、実践的な理想主義者であり、物事を客観的に観察し、記録する冷静な研究者の一面をも有していた。

フォークナーは、荒野の中でアイク少年の熟成をじっと見守り、忍耐強く待つ、という風であったが、つまり、少年の師匠サム・ファーザーズは、教えるが見守る、という風であったが、ソローのほうは、博覧強記とも言える該博な知識をもって、時として、辛らつなまでの言葉を駆使しつつ教える、教訓をたれる、といった面が見られるのではなからうか。もっとも、これもソローのよさなのではあるが。ソローは、人々に「自己の内なる新大陸、新世界を探検せよ」「君自身を探れ」と言って新しいものを求めて「限界なしに」語った。そして、人にもそうするように要求したのである。

「土地」(land)というものについて言えば、所有的な意味での「土地」を突き離すという点で、両者は相共通するものを持っているが、フォークナーにあっては、一族、先祖、家の過去といったものが、原罪的なものに対する贖罪しよくの心といったものが、また、地霊的なものがいつもつきまとっている。それに対して、ソローにあっては土地所有に否定的な

のは、あくまで「^こ個」とか「^{われ}我」とかを守る、保持するための行為である。彼の場合、世俗的ながらも、^{かせ}様からの自由や解放を希求するが故なのである。ソローは、素裸の自由な状況にわが身を置いて己れの信ずる道を存分に追求し、己れの自己実現を強く願っていたのである。彼の住まい、そして生活には、自然との間に垣根がなかった。

...大雪には前庭の門への道がなくなるなどということはなく、 元来、門がなく
前庭がなく 文明の世界への道がないのだ!

『ウォールデン』“音”

Instead of no path to the front-yard gate in the Great Snow, no gate no front-yard,
and no path to the civilized world.

Walden “Sound”

フォークナーとソローには、各々の個性や性格、人生背景や環境の違いなどからして、いろいろと異なるところがある。が、同時に、彼らは自然を、^{ふるさと}故郷の風土を愛するという根本的な点において、大いに共通していたわけである。

フォークナーは「農夫（ファーマー）」と呼ばれることをとても好んでいた。彼は自ら農場を持ち、また日本の長野市では、郊外のリンゴ園や水田地帯を訪れたり、野尻湖で遊んだりもしている。ソローも同様に農耕を重んじた。

フォークナーは「熊」や「デルタの秋」で森が破壊されてゆく状況を嘆いたが、ソローも人間の、文明の手による自然への損ないを『ウォールデン』や『メインの森』で批判した。フォークナーのアイク少年は、文明の利器を捨て去ることにより大熊オールド・ベンと出会ったが、ソローも物質文明の利便を避けて、拒否して、森の中の実験生活を試み、貴重な真理を掴んだわけである。

フォークナーは『サートリス』「熊」「デルタの秋」などに見られるように、自然を傷ついたり、或いは苦悶する心の癒しの場とも見たが、ソローも自然の内ぶところに飛び込み、それと一体化することで心を洗い清められると考えていたように思える。

フォークナーの言う森林の、つまり自然の復讐（「デルタの秋」）は、ソローの『メインの森』におけるクターデン山頂の大自然の畏怖すべき原初の姿へのおののき、人間を突き離し、拒否して、神への甘えを許さない大自然の生の顔、荒涼とした畏怖すべき姿へのおののきを、意味は違うであろうが、思い出させもするのである。

フォークナーとソローの両者は、それぞれが生きた時代も住んだ場所もかけ離れている。しかし、自然を愛する心情、自然と一体化することの意味や喜び、そしてキリスト教的原罪からの脱却からであれ、或いは空虚な日常生活からの脱却からであれ、自然に帰ろう、自然への帰一を計ろう、などという点で、両者は大いに共通するものを有していたのである。